

高学年期女子の友人関係における関わりの多様性と社会的発達 — 大学生女子の回想的自由記述をふまえて —

岩 田 美 保

千葉大学・教育学部

The diversity of peer relationships, and social development in early adolescent girls: Analysis of retrospective description of female university students

IWATA Miho

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究は、多様な対人関係を築いていると考えられる高学年期の女子の友人関係における関わりの様相について、大学生女子の回想的な自由記述に基づき検討を行った。第一に、高学年期に遊びや行動を共にした相手については〈女子の数人の友人／グループ〉が最も多かったが、〈クラス全体や大人数〉、〈下級生〉等も次いでみられ、幅広い友人関係の構築がなされていたことが窺われた。第二に、高学年期における友人関係の関わりについては、1) 親密・閉鎖的な関係、2) 仲間意識、3) 自己調整・自己理解、4) 友人関係の複雑化・葛藤、5) 対人関係の広がり、6) 異性への意識、という観点からその様相をみたところ、ポジティブやネガティブな状況に関わらず、社会的発達が深まる高学年期ならではの多様で高度なやりとりがなされていたことが窺われた。今後は学校規模や学級の雰囲気等の環境要因や教師の関わりもふまえ、より詳細な検討を行う必要性が示された。

キーワード：高学年期（前青年期・思春期）(Early adolescence) 友人関係 (Peer relationship) 女子児童 (Girl) 回想的記述 (Retrospective description) 女子大学生 (Female university student)

問題と目的

幼児期から学童期にかけて、子どもの社会的世界は家庭から園、学校へと広がっていき、子どもは大人よりも仲間とより多くの時間を過ごすようになっていく (Rubin, Bukowski, & Parker, 2006)。こうした中で、小学校の高学年頃になると、2次の信念の理解や、自己の複雑な感情の理解や表出が洗練され、さまざまな相手の心の状態について理解したり、感情調整等を行いながら関係を築いていくことも可能となってくる (Perner & Wimmer, 1985; Saarni, 1999; Shaffer, 2005; 岩田・古重・鶴島, 2013)。本稿では、こうした社会的理解を基盤として、社会的な発達が深まる時期である高学年期の女子の友人関係における関わりの様相に着目する。

そもそも、学童期における仲間関係は、同性同士によって構成されることが多いとされる (Leaper, 1994)。高学年頃ごろにかけては、こうした男子グループと女子グループの特徴の違いがより顕著になるとされてきた。例えば、男子たちが、より大きく結束したグループを形成していく傾向があるのに対し、女子たちは、より少数のメンバーによる親密な人間関係を構成する傾向がある (Leaper, 1994; 酒井, 2015, ほか)。また、遊びの面でも、男子たちが、スポーツなどを含めたより激しい遊びを行う傾向があるのに対し (Pellegrini & Smith, 1998)、女子は秘密の共有や悩みの相談、交換日記といったコ

ミュニケーションそのものが遊びとなるような関わりを持ちやすい (Azmitia, Kamprath & Linnet, 1998; 播磨, 2000; 酒井, 2015) 等である。播磨 (2000) によれば、6年生頃が交換日記の最盛期であり、女子たちはそれを通じて、グループの帰属意識や「自分たち意識」の確認を行っているという。こうした高学年期の女子にみられる特徴は、ここ十数年、中学生頃から児童期にもその広がりをみせていることが指摘されるチャムグループ (仲良しグループ) (保坂, 1998) にみられる特徴と重なるものともいえるかもしれない。保坂 (1998) によれば、こうしたチャムグループでは、言葉によって、自分たちの共通点や類似性の確認がなされ、閉鎖的な関係が築かれることが特徴とされる。こうした類似性に基づく閉鎖的なグループは、女子たちが「一緒にいること」によって一定の安心感を得るための「居場所」としての性質をももちうる (赤坂, 2009)。それは、同時期の男子たちのグループが「野球が好き」といったことで結びつき、それを実行するための比較的開放的な集団であるのと対照的ともいえる (赤坂, 2009)。

一方、こうした女子たちのグループでは、その中での関係維持に関して微妙なやりとりが求められることもある。鶴飼 (2009) はそうした高学年期の女子たちが、男子たちに比べて、社会的関係に敏感であり、他者と自分の違いから自分を評価するような特徴をもつこと、また、グループの中で、『ちょっと輝きたい』といった願望もありつつも、周りからの反感を買わないように、同調しながら女子たちに特有の微妙な関係を築いていることを指摘している。

このように高学年期女子の友人関係においては、同性グループがその中心となることが考えられるが、一方で、同時期の対人関係はそうした関係に留まるものではないことも予測される。同時期は、男女含めたクラス全体の連携や、他学年を含めたリード役、低学年に対しての世話役といった多様な関係構築がなされ得る時期でもあり、教育上においてもその点は大きく期待されることである。実際に、高学年期以降の友人関係は、特定の相手とのやりとりだけでなく、そうした集団におけるやりとりも頻繁になることが酒井（2015）により指摘されている。

すなわち、高学年期の女子児童は、男子児童とは質的に異なる、少数の親密で閉鎖的な関係をも含みつつも、クラス全体、さらには、他学年等も含む多様な対人関係の中で、さまざまな関係性を構築していると考えられる。前述したように、社会的発達が洗練されてくると考えられる、高学年期の女子たちが、学校生活（放課後含む）において、どのような友人とどのような関わりを構築しているか、それらについてどのように捉えているかについて調べることは、この時期の社会的発達を窺い知る上でも極めて重要なことといえる。

こうしたことをふまえ、本稿では、高学年期の女子の友人関係における関わりの様相についての基礎資料を得るために、大学生女子の回想的な自由記述内容に基づいて検討を行うこととする。本稿での友人関係とは、学校生活（放課後含む）の中で共に遊んだり、行動を共にする相手と捉える。女子大学生たちが、小学校の高学年期において、どういった友人と遊びや行動を共にしていたか、また、その関わりはどのようなものであったかについての自由記述を求め、その様相について分析を行う。記述内容は、高学年期から一定の時間が経過していることにおいて限界はあるが、経験を見直すことで当時の人間関係を改めて捉えられる部分もあると考えられる。こうした点は現在そうした関係の中にある高学年期児童とはまた異なる角度から概観した、同時期の友人関係の特徴に関わる貴重な基礎資料を得られる可能性がある。今回の検討では、それらを通じて今後検討すべき課題についても整理を行っていきたい。

方 法

1) 研究協力者

首都圏にある国立大学2、3年生。本研究では、2010～2011年に得られた、140名分の記述内容のうち、女子98名の記述内容を分析対象とした。

2) 記述内容について

教育学部における授業を通じて、「高学年期の友人関係における関わり」についてふりかえってもらい、無記名による自由な記述（性別・学年のみ選択）を求めた。なお、記述は強制ではないこと、また、記入にあたっては、書きたくないことは書く必要はないこと、記述内容については高学年期の友人関係の発達の全体的な特徴を明らかにすることが目的であり、データは研究に限りて使用する可能性があることをあらかじめ伝えた。なお、対象学生は異なる地域のさまざまな学校規模の小学校に通って

いたことが想定されるが、今回は第一段階の分析であり、全体的な特徴を掴むことを目的としたため、それらの点については特に尋ねなかった。なお対象学生はこれまでの受講内容等から、子どもの発達についての基礎的な知識はある程度あり、心理・教育的な視点を一定程度もちながら自らの経験を振り返ることができると考えられた。

3) 分析について

全体の記述内容から、それぞれ共通してみられるキーワードや意味内容を抽出し分類を行った。いずれの分類においてもあてはまる記述が複数ある場合はそれぞれに加えた。分析にあたっては、無記名であるものの記述内容から、個人が特定されることのないように配慮した。なお、本稿で、記述内容を例示するにあたっては、記述内容が長い場合などは、意味を変えない程度に筆者が記述の一部の短縮や要約を行った上で示した。

結果と考察

1. 高学年期に遊びや行動を共にした相手

記述内容をもとに、高学年期の頃に共に行動や遊びをした相手として挙げられた対象（複数記述含む）についてまとめた結果を、Table 1に示した。全体として、〈女子の少数の友人／グループ〉が全体（98名）のうち61人（62.2%）において挙げられており、最も多かった。具体的な記述内容としては、「同じメンバーのグループでの遊びや行動が普通になった」、「特定の仲良しグループと一緒にいる」、「遊ぶ友達は固定、毎日同じ子と遊ぶ」、「狭く深い友人関係、グループ内のみ遊ぶ。他のクラスメートは話すだけ」、「特定の友人と一緒に過ごす時間が増えた」、等であった。これらは、高学年期の女子の友人関係の大きな特徴とされる、緊密なグループ形成に関わる指摘（酒井、2015、等）と合致するものといえる。

一方、〈クラス全体・大人数で（男女混合）〉についても21人（21.4%）において挙げられた。具体的には「状況によって仲良しや大人数など臨機応変。男女でも一つの遊び」、「特定のグループもあったが、クラスの他の友達とも仲が良く、友人関係が広がっていった」、「個別よりは全体的に仲良くなり、自分たちで遊びを作り出して遊んだ」、「同学年もいろいろな活動を通して、みんながみんなを好きという感じ」、「クラスのみんなで音楽に興味をもった」、「大人数で遊ぶことが増え、遊びにルールが生まれ協力して遊ぶようになった」、「少人数学級で、

Table 1. 高学年期に遊びや行動を共にした相手
（大学生女子の自由記述内容に基づく）

女子の少数の友人／グループ	61	(62.2%)
男子の友人／グループ	3	(3.1%)
クラス全体・大人数で（男女混合）	21	(21.4%)
クラスや学年をまたいで	2	(2.0%)
部活の仲間／集団で	4	(4.1%)
下級生	11	(11.2%)
習い事の友人	1	(1.0%)

注. N=98、記述内容が複数にまたがる場合はそれぞれに加えたため、%の合計は100.0%にならない。

クラス全体で遊ぶ機会が増えた」等である。先述した「少数の友人・グループ」が61名によって挙げられた一方で、こうした「クラス全体・大人数で」という記述が21名と少なからずみられたことは興味深い点といえる。他方で、21名のうち約半数（10名）においては『特定の仲良しグループがありつつも、全体でも仲が良い』といった記述もみられた。こうした、クラス全体での遊びはもとより、仲良しグループがありつつも全体での仲も良いといった点については、学校規模や学校風土、学級の雰囲気といった環境要因による影響も推察されるところではあるものの、高学年女子の友人関係の深化と広がりが示唆される結果として興味深いものといえる。今後さらに詳細な検討を行う必要がある。

さらに、「下級生」を対象として挙げた記述も11名（11.2%）にみられた。具体的には「クラブを通して、同学年だけでなく、他学年（下の学年）とも仲良くしていた」、「ルールや規則のある大人数での遊びが楽しく、個人だけでなく、他者や下級生も楽しめる遊びの工夫をした」、「下級生をまとめながら遊ぶ」、「低学年の子の世話を含め年下の子ともよく遊ぶ」、「低学年の子どもをあつめて遊ぶことも多い。学童の子とも一緒に遊ぶ。最上級生であるという自信から、年少の子どもの面倒をみる」、等であった。

これらは、自由記述であるため、友人関係やそのかわり方がもたれる機会（学校、学童、放課後等）や状況（ある程度強制的なものなのか、自主的なものなのか）のどこに焦点をおいて想起したり、記述するかについて個人差があった可能性がある。また、先述したような環境要因や教師による教育的な働きかけ（酒井、2015）によって、状況がかなり異なるものであった可能性も考えられる。しかしながら、総じて、幅広い級友たちとの発展的で良好な友人関係を築くこと、また同性の閉鎖的なグループ関係があったとしても、そうした関係と並行して、クラス全体や下級生も含めた幅広い良好な関係の構築が可能であることが示唆されるものとして、重要な結果といえる。

2. 高学年女子の友人関係の特徴

自由記述をふまえ、友人関係の特徴を抽出し、分類を行った結果がTable 2である。友人関係の特徴としては以下の1)～6) (Table 2) に整理された（複数記述含む）。

1) 親密・閉鎖的な関係

① 特定の友人仲間やグループの形成と行動

ここでの記述は、特定の少数の友人や小グループをつくって、遊びや行動を共にすることに関するものであり、上述した『1. 〈遊びや行動を共にした相手〉として自由記述で挙げられた対象』（Table 1）での〈女子の少数の友人／グループ〉に関わる記述部分と重なるものである。そのため、具体的な内容は省略する。既述した通り、98名中61名において挙げられたことから、高学年女子の友人関係を振り返ったときに、こうした女子の少数のグループに関わる経験が大きな要素を占めるものであったことが窺われる。一方、「（複数のグループ間にたち）、クラスの中でどのような位置で生活していくかを模索」といった記述や「グループ内にリーダーが出現し、リーダーに合わせた行動も」といったリーダーへの同調に関わる記述もみられ、居場所（赤坂、2009）としてのグループについて、葛藤や模索があったことが窺われた。グループ内外の移行や変化に関わる複雑な関係の有り方は女子グループの大きな特徴の一つとされるが（赤坂、2009；鶴飼、2009）、こうした葛藤を含んだグループへの思いについては、今回の自由記述のみでは十分ではない部分もあったため、今後さらに検討を行っていく必要がある。

② 悩みや秘密の共有（交換日記など含む）

親密な関係の少人数の友人やグループ内で悩みや秘密を共有したことについての記述は16名にみられた。具体的には、「身体を使って遊ぶというよりも、交換日記やプロフィール帳などが中心」、「交換日記でお互いのことを手紙に書いたりする」、「特定の決まった友達と秘密をもったりしてより仲良くなった」、「おしゃべりや相談をして親睦を深める」等である。播磨（2000）は短大生への調査から、交換日記には『友達のことや、先生のこと、うれしかったこと、むかついたこと、悪口』など、日常的で平凡なことが書かれる傾向があり、特別なことではなく、日常生活にある共通の話題を書くことで「自分たち意識」を高めているのではないかと指摘している。上記の記述内容からも、悩みや秘密の共有が、ある種の楽しさを生み出すものとして、親密・閉鎖的な関係維持において一つの大きな要素を占めているものであったことが窺われる。

Table 2. 高学年女子の友人関係にみられた特徴（大学生女子の自由記述内容に基づく）

1). 親密・閉鎖的な関係	・ 特定の友人仲間やグループの形成と行動	61
	・ 悩みや秘密の共有（交換日記など含む）	16
2). 仲間意識	・ クラス全体としての意識	19
	・ 仲間との協調や工夫	15
3). 自他調整・自己理解	・ 自他の要求や関係の調整	12
	・ 相互の共通性と違いの理解	10
4). 友人関係の複雑化・葛藤	・ けんか、対立などの直接的な対人トラブル	12
	・ 陰口などの表面に出にくい対人トラブル	5
5). 対人関係の広がり	・ 下級生の世話やまとめ役	11
	・ クラスを超えた仲間とのかかわり	5
6). 異性への意識	・ 異性への意識と関わりの変化（男女が分かれる）	9
	・ 異性への意識と関わりの変化（男女一緒に）	9

注. N=98, 記述内容が複数にまたがる場合はそれぞれに加えた。

2) 仲間意識

① クラス全体としての意識

クラス全体としての意識については19名が挙げている。具体的には「クラスとしての連帯感があった」、「仲間意識が強く、『みんなで』という意識があった」、「仲間意識が強く、相手の悪い所を指摘しづらくなる」等である。こうした意識は、「〇〇クラスの一員としての自分」といった、所属集団に基づく社会的アイデンティティ(Tajfel, 1981)と表裏一体と考えられる。そうした意識はその集団への所属意識を強く持つ場合、好意的なものになるとされ(酒井, 2015)、良好な学級の雰囲気や、集団的なやりとりが建設的に行われるような教師による教室運営(酒井, 2015)などの影響が推察されるところである。近年の学校現場においては、リーダーシップの役割が女子児童に偏っているという指摘(古谷, 2015)もみられる。女子児童たちが、閉鎖的なグループ関係のみならず、こうしたクラス全体としての意識や、協調関係をどのように築いていくかという点は、大変興味深いものであり、今後の焦点的な検討が望まれる。

② 仲間との協調・工夫

仲間間での協調や工夫も15名によって挙げられた。具体的には、「みんなで工夫する能力。皆で独自のルールを決めて遊ぶなど。これまでと同じことをしていても、より楽しい方法を話し合える」、「大人の力を借りずに、自分たちで友人関係を構築できる。高度な道具を使ったり、あるものを利用してオリジナルな遊びをつくる」、「自分たちで遊びを作り出して遊んだ」、「大人数で遊ぶことが増え、遊びにルールが生まれ協力して遊ぶようになった。自分で考えて遊ぶ」等である。記述内容からは、遊びを通じた仲間同士の協調や工夫をする経験が仲間意識にもつながる重要な機会となっていることが窺われる。Singer & Singer (1990)によれば、児童期や青年期初期は学校という場に行くことや児童期をかけて身につく認知能力の影響により想像力が拡張される重要な時期であると指摘している。社会的発達が深まる高学年期においては、こうした想像力の発達とも関連しながら、遊び等に関してのルール作りも含めた高度な工夫が仲間同士で行われていくようになることが推察される。

3) 自他調整・自他理解

① 自他の要求や関係の調整

ここでの記述は、自他の異なる要求や関係をどのように調整し、うまくやっていくかということに関するものであり、12名にみられた。具体的には、「自分の思いを伝えることと友達とうまくやっていくことのバランスが難しかった」、「周囲の他人を認め、自分をそこに溶け込ませる」、「友達のやりたいことに合わせる。けんかをしたら謝って関係修復、相手の気持ちを尊重」、「自分の好みではなくても相手に合わせるなど。友達が遊ぶ遊び。他の人に合わせるようになった」などである。自他調整能力が洗練されてくるとされる高学年期ではあるが、これらの記述からは、自他の要求や関係の調整に難しさを感じていたことや、何とか相手を受け入れようと、相手に依拠した形での対処についての記述がみられていることが印象深い点といえる。こうした相手に譲歩する形で関係調整を行うということについては、我が国の集団の

和を重んじる傾向(保坂, 1998)などが影響している可能性もある。一方、佐藤(2009)が小学生(4, 5, 6年)の自己主張について検討した研究から、そうした自己主張については性差がみられ、女子の自己主張が男子に比べて緩やかであること、特に〈強い存在への服従〉が高く、強そうな子ども(や権威をもつ存在である教師)に対しては、主張できない傾向があることが見いだされており、こうしたグループ内の力動関係が影響していた可能性も考えられる。実際に、先にも挙げた「グループ内にリーダーが出現し、リーダーに合わせた行動も」といった記述も2名にみられており、こうしたリーダーに対する同調がそうした自己主張の程度や関係調整に影響を与えた可能性は少なくないかもしれない。そうした状況での関係調整のあり方がどのようなものであるかについては、さらに焦点化した検討を行うことが必要である。一方、「相手の意向と自分の主張の加減がうまくなり、以前よりうまく友人とつきあえるようになった」、「相手との関係が悪くならないように、よく考えて発言したり、相手を思いやって行動するようになった」等、自他の関係調整をうまく行うことができたとする内容もみられた。これは社会的な発達が進むことで可能となる洗練されたやりとりが同時期に行われていた様相が窺えるものとして興味深い内容といえた。

② 相互の共通性と違いの理解

互いの共通性と違いの理解に関わる記述は10名にみられた。具体的な内容としては、「おしゃべりを通じて自分の考えを話したり、他者の考えを聞くことが楽しい」、「おしゃべりではお互いを深く理解するためのやりとり」、「お互いの相性や性格なども理解していく中で、他者との食い違いにも気づく」、「性格的に近い人が友達になり、自分の気持ちをわかってくれて共有できる人を探していくようになった」、「同じ意見をもっていなくても互いに議論し合える友人」といったものである。こうした記述は、女子たちが、この時期に互いの観点の違いを理解し、お互いを理解するための相互的なやりとりを積極的に行うようになるという指摘(Azmitia, Kamprath & Linnet, 1998)とも合致するものといえる。自分と相手の性格や考えの違いを認めたり、共通なものを見出して、信頼関係を深め親和的な関係を築いていく能力は、この時期非常に重要なものとなる(Buhrmester, 1990)。実際に、ここでは、「友人の中身を理解した上で共通点の多い人と一緒にいる」、「似た性格・個性の人と一緒にいるようになった」、「相手を尊重し、お互いを高め合おうとする関係」といった記述もみられた。こうした記述からは、社会的発達が深まるとされる高学年期にこうした互いの共通性と違いを捉えた上で、互いの理解に基づく関係形成が行われていたことが窺われるものとして、大変興味深いものといえる。

4) 友人関係の複雑化・葛藤

① けんか、対立などの直接的な対人トラブル

実際にけんかや対立といった対人トラブルに直面したことについての記述は12名にみられた。「自分の考えがあるため、ぶつかることもあり、けんかしてぎくしゃくすることもある」、「友達とけんかでぶつかることが増えた」、「友人関係は複雑化」、「人づきあいの難しさを認識」、

「グループ内でトラブル」、「悩みや友達との意見の衝突などいろいろな複雑な思い」等であり、互いの意見があるからこそ生じる対立的な状況や、そこでの人間関係に関して複雑な悩みが生じていたことが窺われるものである。一方で、「仲が良いという意識もでてきてけんかもするようになったが、これはその時だけでなく、その後も関係を築いていきたいという気持ちの表れ」、といった記述や、ここには含めていないが「けんかは減ってきた」、「できるだけケンカを避けるように」といった記述もみられ、3)で述べた、〈自我調整・自我理解〉とも関連し、この時期のけんかや対立に関わる状況や認識およびそこでの対処については幅があることが窺われた。高学年にみられるこうした対立や葛藤に児童たちがどのように対処や解決を行っていくかは、社会的発達やソーシャルスキル、また、学級経営にも関わる重要な課題といえ、今後、状況を絞りながら焦点化した検討を行っていく必要がある。

② 陰口などの表面に出にくい対人トラブル

ここでの記述は、上記①でのどちらかという直接的な対立に対し、陰口や態度で示す、といった、表面に出にくいじわるやトラブルに関わるものであり、5名の記述にみられた。具体的には、「ケンカも言い争いもあるが、気持ちを心に留めて態度で表す。感情をあまり表に出さないのにけんかが生じていたりする」といったものである。こうした記述からは、社会的理解が進むとされる同時期において、ネガティブな関わりではどのようなやりとりがなされていたかについての微妙な様相が窺えるものである。しかしながら、今回は自由記述であったため、上記の①とも区別が難しいものがみられたこと、また、今回の記述では高学年の友人関係の比較的肯定的な側面が書かれる傾向にあり、こうした対人トラブルに関する内容は限られたものとなった可能性があり、今後の検討の余地が残された。

5) 対人関係の広がり

① 下級生の世話やまとめ役

ここでの記述は、上述した『1. 〈遊びや行動を共にした相手〉として自由記述で挙げられた対象』(Table 1)での〈下級生〉の回答と重なるものであるため、具体的な記述内容は省略する。既述した通り、11名によってこうした下級生との関わりが挙げられたことから、高学年となっても、低学年との関わりや、共に遊ぶ機会が地域や、学校生活の内外で継続してみられ、重要な人間関係(友人関係)となっていたことが窺われる。これらは、自分より年少の者の立場に立ち、世話をしたり、共に遊べる遊びを考えたりすることが促される機会であり、社会的発達に関わる重要な経験となり得る。こうした関わりについては、今後環境要因等もふまえ、より詳細な検討を行っていく必要がある。

② クラスを超えた仲間とのかかわり

ここでは主に、クラスを超えた、クラブや部活動を通じた関わりや、先輩等とのかかわりを示す。具体的には、「仲の良い少数の人だけでなく、クラスや部活の集団も大事になる。」、「クラブを通して、同学年だけでなく他学年とも仲良くしていた」等、5名によって挙げられた。特に、記述内容にある、「仲のよい少数の人だけでなく、

クラスや部活の集団も大事になる」といった記述は、高学年の対人関係が少数グループに留まるものではなく、多様な関係性への広がりをもせるようになることを表しているものといえ、興味深いものである。こうした高学年の幅広い人間関係という点については今後十分に視野にいれていく必要があるといえる。

6) 異性への意識

① 異性への意識と関わりの変化(男女が分かれる)

異性を意識することにより、クラス等における男女の遊びや関わりが変化し、男女分かれて遊ばなくなったという記述は9名にみられた。具体的には、「男女で遊ぶことが少なくなる」、「男女を意識することに伴い、男女では遊ばなくなってきた」、「男女を意識して、女子特有の遊びも増えた」等である。これは、「問題」部分にも述べたように、高学年にかけて、同性同士のつながりがより多くを占めるという特徴(Leaper, 1994)が強く表れているものと考えられる。一方、「男女を意識、お互いに女らしく、男らしくを意識」、「男女を意識するようになり、行動や言葉遣いが変わっていった」等、ジェンダーに基づいた意識や行動についての内容もみられた。こうした意識や行動の変化は、同時期の友人関係に大きく影響を与え得るものと考えられ、今後注視していく必要がある。

② 異性への意識と関わりの変化(男女一緒に)

男女を意識しつつも、一緒に遊ぶようになったという回答は9名によって挙げられた。「男女関係なく外で10数人でドッジボールなどをして遊ぶようになった」、「異性を意識しすぎないクラス全体が良い雰囲気」、「みんなで遊ぶときは男女一緒に遊ぶが、意識してはいる」、「校庭でドッジボールなど、男女一緒に遊ぶことが増えた。多くの人と関わり、コミュニケーションや身体的能力が伸びる機会であった」。複数の記述にみられたものとして、ドッジボール等のスポーツを男女共にしながら遊ぶことが以前よりも増えたというものである。スポーツ等を通して、男女が協力する場面をつくるといった実践(吉田, 2015)も効果があることが窺われることから、学級の雰囲気をより良くしていく上では、男子と女子双方が意識しつつも、良好に関わり合うことや、そうした関わりを支えるような取組みが不可欠であるといえる(吉田, 2015)。こうした男女の関わりを含めたクラス全体の連携については、これまでも述べてきた学校の規模等の環境要因も含め、今後のさらなる検討が望まれるものといえる。

まとめ

本研究は、親密で閉鎖的な関係をも含むさまざまな友人関係を築いていることが予測される高学年女子の友人関係における関わり性の様相について、大学生女子の回想的な自由記述内容を手がかりとし、検討を行った。総じて、彼らが高学年においては、〈女子の数人の友人／グループ〉といった関係だけでなく、〈クラス全体や大人数〉、〈下級生〉等も含んだ、幅広く良好な友人関係構築がなされていたことが示唆された。さらに、記述内容に関して、1) 親密・閉鎖的な関係、2) 仲間意識、

3) 自他調整・自他理解, 4) 友人関係の複雑化・葛藤, 5) 対人関係の広がり, 6) 異性への意識, という観点から分類し, それぞれ実際に経験された友人との関わりの様相について検討した。総じて, 1)~6) として挙げた高学年期の特徴はこれまで先行研究で指摘されてきた特徴とほぼ合致するものであったが, 自由記述にみられるそれぞれの関わりにおける様相からは, ポジティブやネガティブな状況に関わらず, 高学年期ならではの高度かつ多様なやりとりがなされていたことが窺われるものであった。特に〈3) 自他調整・自他理解〉および〈4) 友人関係の複雑化・葛藤〉関わる記述内容については, この時期の社会的理解が高学年期の女子の社会的文脈でのやりとりにどのように反映するかについての示唆を与えてくれるものといえ, 今後の検討を行う上で興味深い結果が得られたと考えられる。一方, こうした在り様においては, 学校規模や学校風土, 学級の雰囲気といった環境要因による影響や, 教師による教育的な関わりによる影響が少なくないことも推察された。今後はそうした点をもふまえた上で, 上記の3), 4) も含めより詳細な検討を行っていく必要がある。

最後に, 今回の分析は基礎資料としての全体的な特徴を捉えることを目的としたが, 自由記述であったため, 分析においては限界もあった。また, 近年は情報機器を初め, SNSなどコミュニケーションに関わる環境も大きく変化しており, 友人関係を取りまく状況はさまざまな点で異なっている。こうした多様な関係構築が現在の児童間で実際にどのようになされているかについて, 今後は検討を進めていきたい。

付 記

研究に協力してくださった学生の皆さんに感謝致します。

データ分析にあたり平成27年度科学研究費補助金(基盤研究C, 研究者代表, 岩田美保)の助成を受けた。

引用文献

- 赤坂真二 (2009). 担任だからこそ嫌われる. 児童心理, No.951. 74-77. 金子書房.
- Azmitia, M., Kamprath, N.A., & Linnet, J. (1998). Intimacy and conflict: The dynamics of boy's and girl's friendships during middle childhood and early adolescence. In L. H. Meyer & H. Park (Eds.), *Making friends: The influences of culture and development: Vol.3, Children, youth, and change: Sociocultural perspectives* (pp.171-187). Baltimore, MD: Paul H. Brooks.
- Buhrmester, D. (1990). Intimacy of friendship, interpersonal competence, and adjustment during pre-adolescence and adolescence. *Child Development*, 61, 1101-1111.

- 古谷真宏 (2015). 女子中心のリーダーシップに偏っている. 児童心理, No.999. 90-93. 金子書房.
- 播磨俊子 (2000). 心をつなぎ耕す書きことば. 落合良行編著 小学校六年生の心理 子ども期からの旅立ち (pp.82-112). 大日本図書.
- 保坂 亨 (1998). 児童期・思春期の発達. 下山晴彦編 教育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学. (pp.103-125). 東京大学出版会.
- 岩田美保・古重奈央・鶴島規晃. (2013). 高学年学級での話し合いにおける自他の感情への言及を含むやりとり—葛藤状況に対してネガティブな感情をどのように表明するか—. 千葉大学教育学部研究紀要, 61, 163-166.
- Leaper, C. (1994). Exploring the consequences of gender segregation on social relationships. In C. Leaper (Ed.), *Childhood gender segregation: Causes and consequences* (pp.67-86). *New Directions for Child Development*, No.65. San Francisco: Jossey-Bass.
- Pellegrini, A. D., & Smith, P. K. (1998). Physical activity play: The nature and function of a neglected aspect of play. *Child Development*, 69, 577-598.
- Perner, J., & Wimmer, H. (1985). "John *thinks* that Mary *thinks* that..." attribution of second-order beliefs by 5-to 10-year-old children. *Journal of Experimental Psychology*, 39, 437-471.
- Rubin, K. H., Bukowski, W. M., & Parker, J. G. (2006). Peer interactions, relationships, and groups. In W. Damon & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of child psychology, Vol.3: Social, emotional, and personality development* (6th ed., pp.571-645). New York: Wiley.
- Saarni, C. (1999). *The development of emotional competence*. New York: The Guilford Press.
- 酒井 厚 (2015). 友だち関係の質が変わってくる. 児童心理, No.999. 37-42. 金子書房.
- 佐藤淑子 (2009). 日本の子どもと自尊心 自己主張をどう育むか. 中央公論新社.
- Shaffer, D., R. (2005). *Social and personality development*. Belmont, CA: Wadsworth.
- Singer, D. J. & Singer, J. L. (1990). *The house of make-believe Play the developing imagination*. Cambridge: Harvard University Press. 高橋たまき・無藤 隆・戸田須恵子・新谷和代訳 1997 遊びがひらく想像力 創造的人間への道筋 新曜社.
- Tajifel, H. (1981). Human groups and social categories: Studies in social psychology. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 鵜飼啓子 (2009). 思春期女子の心理と行動—指導, かわりの難しさの背景にあるもの. 児童心理, No.892. 17-22. 金子書房.
- 吉田 博 (2015). 男女の仲が悪い—“男子も女子も”全員を育てる学級経営を. 児童心理, No.999. 86-89. 金子書房.